

## 肺癌患者における全身状態と 食事摂取量との関係

かわ さき ゆう じ<sup>1)</sup> はら だ とも や<sup>1)</sup> たけ だ けん いち<sup>1)</sup>  
河 崎 雄 司<sup>1)</sup> 原 田 智 也<sup>1)</sup> 武 田 賢 一<sup>1)</sup>  
とう げ ひろ かず<sup>2)</sup> とく やす ひろ かず<sup>1)</sup>  
唐 下 泰 一<sup>2)</sup> 徳 安 宏 和<sup>1)</sup>

キーワード：肺癌，全身状態，食事摂取量

### 要 旨

肺癌患者において全身状態の指標である Performance status (PS) と食事摂取量との関係をエネルギー消費の観点から調べ、全身状態の悪化した患者における食事摂取の増量の意義を検討した。

全身状態の悪化した肺癌患者では食事摂取量は減少していたが、総エネルギー消費量も減少していると考えられた。総エネルギー消費量の少ないことは、必要とされるエネルギー摂取量も少ないと考えられ、全身状態の悪化した肺癌患者では積極的に食事量を増やす必要性は必ずしもないように思われた。

### はじめに

癌患者では食事摂取量の減少は予後因子である体重減少に結びつくため、減少時には食事摂取量を増やすため種々の介入が行われている<sup>1)</sup>。しかし、全身状態の悪化した患者における食事摂取の増量の意義は必ずしも明らかではない。癌患者での全身状態の1つの指標として ECOG-Performance status (以下 PS) がある。ここでは PS で捉えた全身状態と食事摂取量との関係をエネルギー消費の観点から調べ、全身状態の悪化

した患者では食事摂取量を増やす必要性は必ずしもないように思われたので報告する。

### 対象と方法

精査のため入院し、肺癌と診断された未治療の男性患者39名を対象とした(表1)。方法は numerical rating scale (図1) で食欲の程度、診療録より入院後3日間の平均食事摂取量(割合)、食事箋でのカロリー量、1日当たりの平均カロリー摂取量を調べた。また、携帯用簡易熱量計(METAVINE-N, VINE社, 東京)で安静時エネルギー消費量を測定し、Harris-Benedictの式より算出した基礎エネルギー消費量に対する安静時エネルギー消費量の比を求めた。さらに、全身

Yuji KAWASAKI et al.

1) 松江赤十字病院呼吸器内科

2) 鳥取大学医学部分子制御内科(元松江赤十字病院呼吸器内科)

連絡先：〒690-8506 松江市母衣町200番地